

最優秀賞

『ことばおてだまジャグリング』 山田 航著

文学部 文学科1年 山田 純気

孤独の中でことばとあそぶ

ページの合間から、削りたての鉛筆の匂いが漂ってくる気がした。教室の隅、窓際の土ぼこり。校庭から聞こえる歓声をよそに夢中で自由帳に向かったことがある人なら、誰もが懐かしさを覚えるはずだ。筆者は「短歌の世界に現れた超新星」と評された新鋭歌人だが、作歌のコツや文章の書き方については一切触れられていない。綴られるのは幼いころから続く「ことばあそび」への情熱だけ。スポーツも読書も嫌いで友達ができず、ひたすら国語辞典をめくって遊んでいたという。紙面に並ぶのは活字だが、おそらく連想されるのは、あの頃手を真っ黒にして描き続けた迷路や絵しりとりに近いだろう。

扱われる「ことばあそび」は、連想ゲームや回文といったメジャーなものから、五十音すべてを使って文章を作る「パングラム」といった難易度の高いものまで多岐にわたる。その中のひとつ、とりわけ筆者が得意とするのが「アクロスティック」だ。

〈反照のなかでふたりは見つめあいズームアウトがきれいにきまる(山中千瀬)〉この歌を五七五七七のリズムで区切って頭文字を読んでいくと、「ハナミズキ」という語が浮かび上がる。このように、ある単語を文章に折り込むことを楽しむのがアクロスティックである。少年漫画やテレビ番組からの身近な引用に次ぐのは、在原業平の折句だ。次いで自らの短歌、そして平安中期の歌人源順の『あめつちの詞』と、今昔問わず幅広い例示とその分析が続く。二〇代の歌人も歴史上の偉人も「山中さん」「シタゴーさん」と呼ぶ彼にとって大切なのは、伝統や評判ではなく、ただそこにあることばでいかに面白く遊べるかなのだろう。見事なショーに感嘆のため息をつきつつ、視線をページ上部に走らせると……。鮮やかな仕掛けが随所に施され、最後の最後まで気が抜けない。

とにかくコミュニケーションが重視される現代である。ことばは情報伝達のツールとみなされ、簡潔でわかりやすい文章だけがよしとされる。あるいは文字数はそのまま情報量とみなされ、一文字〇・五円で記事を買収するWEBライター募集が絶えない。子どもから大人まで、ことばを統制し上手く使いこなすことに神経をとがらせている時代だ。しかし筆者は「いちばんぞくぞくするのは、自分でも予想しなかったかたちに言葉が自立してゆく瞬間」だと言う。その手の上で繰り広げられる「ことばのおてだま」に見とれるうちに、凝り固まった定型文はばらばらにほぐされ、伝えるべき「誰か」の姿は霧散する。残るのは意味や価値から離れた純粹なことばと、自分ただ一人だ。筆者が文学賞のスピーチで披露した回文が胸に響く。「世界を崩したいなら泣いた雫を生かせ」。ことばそのものを孤独の中で見つめることで、思わぬ世界が開けるかもしれない。